全博協研究紀要　第24号
2022年３月31日
全国大学博物館学講座協議会

地方自治体と連携した地域文化資源周知のための取り組み

中島金太郎、鐘ヶ江　樹、太田　直宏、田川　太一
松田　光汰、太田　千晴、近藤あかね、築城ひかる
宮崎　奈菜、岩崎　　空、衞藤　　悟、椎葉　祐太
大黒　智樹、伊達　寛人、茶屋　伊織、朝永絵梨花
諸岡　　涼、山口　悠紀

地方自治体と連携した地域文化資源周知のための取り組み

中島金太郎*1、鐘ヶ江　樹*2、太田　直宏*3、田川　太一*3、松田　光汰*3、太田　千晴*4
近藤あかね*4、築城ひかる*4、宮崎　奈菜*4、岩崎　空*4、衞藤　悟*4、椎葉　祐太*4
大黒　智樹*4、伊達　寛人*4、茶屋　伊織*4、朝永絵梨花*4、諸岡　涼*4、山口　悠紀*4

はじめに

長崎国際大学は、学校法人九州文化学園を母体に、長崎県と佐世保市および地元経済界の支援による公私協力方式によって2000（平成12）年に開学した地方大学である。３学部４学科を擁し、人間社会学部国際観光学科に学芸員養成を目的とした博物館学芸員課程が設置されている。本課程は、年間40名程度の学芸員有資格者を輩出しているが、学芸員の養成にあたっては周辺の地方自治体や企業等と連携し、地域に根差した人材の養成を実践している。特に、本学が位置する佐世保市や隣接する波佐見町とは積極的に連携し、波佐見町との連携については『全博協研究紀要』第23号に掲載した「地方自治体と協働した実践的な学芸員教育の試み」や、実践報告である『平成30年度　長崎国際大学　学長裁量経費採択「地域文化資源を活用したMLA連携による博物館展示教育の実践」実施報告書』などによって成果を公表している。

本稿は、３年間にわたって実施している佐世保市教育委員会文化財課（以下、文化財課）との連携事業に関する実践成果をまとめ、学生教育と地域連携の両立について一考するものである。

（中島）

写真１　福井洞窟ミュージアム

写真２　宮地区コミュニティセンター

１　研究の概要

本研究は、博物館学芸員課程と文化財課の連携によって、地域文化資源を周知するための様々な方法について検討し、同時に実践的な学芸員養成を試みたものである。本学と包括協定を締結している佐世保市は、2021（令和３）年度に福井洞窟ミュージアムを新設し（写真１）、また2020年度に宮地区コミュニティセンターをリニューアルするなど（写真２）、近年社会教育施設の新設・更新が推進されている。長崎国際大学博物館学芸員課程（以下、博物館学芸員課程）は、市教育委員

＊１　長崎国際大学　講師　　＊２　長崎国際大学大学院人間社会学研究科地域マネジメント専攻
＊３　長崎国際大学大学院人間社会学研究科観光学専攻　　＊４　長崎国際大学人間社会学部国際観光学科

会との共同研究や本学の学長裁量経費事業として文化財課と密に連携し、社会教育施設に関する様々な活動を共同で実施してきた。これは、本学の人材および知識・技術を市側に提供し、大学側は人材育成、市側は地域文化資源を活用した観光や新施設への寄与といった双方への利益の発生が見込まれたことがその要因である。

本研究は、佐世保市内の吉井地区と宮地区をフィールドとし、前者は2021年度に新設された福井洞窟ミュージアムを、後者は2020年度にリニューアルした宮地区コミュニティセンターを核とした地域文化資源の周知および活用の方法を模索した。具体的には、博物館学芸員課程履修生が主体的に参加し、文献調査と現地調査を通じて得られた成果を精査して、各施設を核とした周遊観光の模索や地域文化資源を対外的に周知する展示製作、吉井地区・宮地区の地域文化資源を巡るマップを作成する形で発表・公開したものである。

地域文化資源の調査および研究を行い、その成果を市民に還元することは、地域博物館の学芸員とって必須の職務で、求められる技能である。現在の学芸員養成課程科目は座学が中心であり、実践的なスキルを涵養させる科目に乏しいことは周知のとおりである。博物館学芸員課程では、近接する地方自治体と連携することで、学生へ実践的なスキルを習得させ、現場で活躍できる学芸員を養成することを意図している。本研究も実践的な学芸員の養成を目的とするものであり、また博物館学芸員課程が置かれている国際観光学科（観光学）の知識・技術をも組み込んだ手法を用いたことが、本学の学芸員養成の特色といえる。（中島）

２　2019年度事業

佐世保市宮地区の公民館は、2021（令和３）年に宮地区複合施設（コミュニティセンター）として改装され、支所と公民館の両方の機能を併せ持つことになった。それに伴い展示スペースの設置が予定されたことから、2019年度末に同館に収蔵されている未整理の民具資料の調査および台帳化作業を実施した（写真３）。

１．調査の方法

調査は、旧公民館に隣接した体育館で行った。当時、体育館の半分は仮設の支所・公民館としてプレハブが設置されており、奥側には作業する十分なスペースが確保されていた。まず体育館内に写真撮影および計測用の機材を搬入し、資料撮影のためのストロボや背景紙の設置による撮影スペースの確保、計測や台帳記述用のスペースの確保等の作業環境の整備を行った。

次に資料の現状把握として、段ボール等に収納されていた資料を一点ずつ開梱し、分類作業を実施した。その後、資料のクリーニング作業を行い、写真撮影・計測・台帳への記述を行った。台帳および整理記号等は、佐世保市教育委員会が使用する様式に基づいて使用し、①整理番号、②分類番号、③名称、よみがな、④製作年代、⑤使用年代、⑥大分類、小分類、⑦用途、⑧寸法、⑨備考、⑩写真等（貼り付け）、⑪その他の11項目を手作業で記載した。現地調査終了後、上記台帳をコンピュータ上で入力・写真張り付けを行い、データ化した。

写真３　2019年度宮地区調査

２．事業の推移と成果

現地調査は、2020（令和２）年２月25日、３月３日、16日、19日の４日間を設定し、教員２名、学生12名が参加した。初日の２月25日は、作業環境の構築、資料の整理・分類・クリーニング、写真撮影・計測・台帳記述を行った。３月３日、16日、19日は、台帳作成を継続し、３月19日には台帳作成を完了し、撤収作業を行った。

４日間の作業の結果、全体で302点の資料を調査・整理した。収蔵資料は、民具、考古資料、自然史資料、文書資料に大別され、民具は製作年代・使用年代ともに不詳なものが多く見られた一方、考古資料と文書資料は中世や近代以降のものが多い傾向が見られた。また、地域史の研究者や地元の発展に尽くした人物など、地元からの寄贈資料が多い傾向にあった。資料別の傾向としては、民具は佐世保市の分類による「衣・食・住」に分類される資料が多いものの、収蔵されている資料に特に目立った特徴や傾向は見られなかった。考古資料は石器・石製品が多く、隣接する西海市に生産拠点があった石鍋も多く収蔵されていた。自然史資料は植物資料（香木）が多く、化石や岩石も少数収蔵されている。文書資料は、明治～昭和初期の教科書が多く、また宮地区は昭和期まで宮村として運営されていたことから、村の運営に関わる行政文書も多数所在している。（鐘ヶ江、松田）

３　2020年度事業

2020年度には、本学の研究費である学長裁量経費に基づく事業と佐世保市との共同研究として行った事業の２事業を実践した。

１．学長裁量経費事業

学長裁量経費は、本学が設定する学内研究費で、学内の教育改革、地域研究及び地域社会活動、大学間連携研究、特別課外活動に取り組む教員又は組織を財政的に支援するための予算と位置付けられている。2020年度には、「地域文化資源の活用に向けたソフト事業開発に関する研究」が採択され、福井洞窟ミュージアムにおけるソフト事業開発に関する研究を実施した。

福井洞窟ミュージアムは、佐世保市吉井町に所在する旧石器～縄文時代の国指定史跡福井洞窟のガイダンス施設として、2021年４月に開館した遺跡博物館である。同館は、国の重要文化財に指定されている福井洞窟出土遺物を保存し、展示・公開することを目的とした施設であるが、福井洞窟からミュージアムまで直線距離で約４kmと離れており、施設の計画段階から遺跡とミュージアムをつなぐ事業の必要性が叫ばれていた。特に、交通インフラの拡充などのハード面ではなく、来訪者が自主的に両地点を訪問でき、また継続して地域住民をミュージアムに取り込むためのソフト面の拡充が課題とされた。

学長裁量経費事業では、ソフト面の拡充の中でも、市民のニーズの掘り起こしと全国の遺跡博物館におけるソフト事業の実践例の把握を目的としたアンケート調査、学生が授業の一環として考案したソフト事業を実践した歴史の福井谷体験ツアー、ミュージアム開館時の周遊観光を意図したマップ作成の３点を重点的に実施した。

（１）市内アンケート調査

福井洞窟ミュージアムのソフト事業を構想するにあたり、地元文化財保存連絡会だけでなく、多くの佐世保市民や佐世保市を訪れる観光客等のニーズの把握が必要と考えられるため、福井

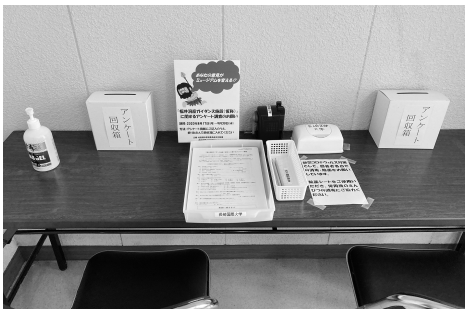

写真４　アンケート設置状況

洞窟ミュージアムに関するアンケート調査を市内各所で実施した（長崎国際大学研究倫理審査番号F-7）。設問は、１．居住地、２．性別、３．年齢、４．博物館利用頻度、５．博物館滞在時間、６．お勧めの博物館施設とその理由、７．福井洞窟の知名度（訪問歴含む）、８．ソフト事業の希望調査、９．ソフト事業のアイデア提供要請、10．広報媒体を中心に設定した。アンケート調査は、各施設の利用者が任意で回答する形を採り、佐世保市役所文化財課、佐世保市うつわ歴史館、佐世保市博物館島瀬美術センター、佐世保市吉井地区コミュニティセンター、佐世保市立図書館、（公財）佐世保観光コンベンション協会、道の駅　させぼっくす99の７ヶ所にアンケート用紙を設置した（写真４）。調査は、2020年８月17日（月）から９月30日（水）の１ヶ月半程度実施し、267件のアンケート用紙を回収した。また、本学の学内ポートフォリオシステム「マナバ」を用いて、「博物館経営論」「博物館情報・メディア論」「民俗学」「教養セミナーＢ」の中でも実施し、４科目合計で254件の回答を得ることができた。

アンケート調査の結果、アンケートの回答者は市内67％、佐世保市以外の長崎県内15％、県外17％、残りは未回答であった。年齢・性別は、どの世代・性別も満遍なく回答いただいた。博物館の利用頻度としては、「気になる展覧会がある時のみ」が43％、「旅行に行ったときのみ」が18％といった、日常利用をしていないとの回答が大半を占めた。また、利用時間は60分以上120分未満が39％と最も多く、次いで30分以上60分未満、120分以上の利用者が多い結果が得られた。福井洞窟の認知度に関しては、知っている人が57％と過半数を占めたが、実際に訪問したことのある人は34％に留まり、認知から訪問を促す取り組みの必要があることが明らかになった。ソフト事業の希望調査としては、①ものづくり体験、②旧石器・縄文時代の暮らし体験、③古代米づくり、④塗り絵、紙芝居、⑤ナイトミュージアム、⑥洞窟バスツアー、⑦遺跡で宿泊体験、⑧謎解き探検、⑨吉井町ウォークラリー／スタンプラリー、⑩SNSでフォトコンテスト、⑪ミュージアムグッズ製作、⑫自然観察会、⑬講座、⑭ミュージアムスクールを選択肢として設定し、複数回答可として参加したい事業について意見を求めた。その結果、最も多かったのが、「ものづくり体験」で16％、次いで「洞窟バスツアー」13％、「ナイトミュージアム」11％、「自然観察会」10％、「旧石器・縄文時代の暮らし体験」と「遺跡で宿泊体験」、「講座」７％、「古代米づくり」と「謎解き探検」６％、「吉井町ウォークラリー／スタンプラリー」と「塗り絵・紙芝居」、「SNSでフォトコンテスト」４％、「グッズ製作」３％、「ミュージアムスクール」２％という結果となった。その他にもソフト事業のアイデアを聞いたところ、「旧石器時代・縄文時代のシチュエーションでの合コン」や「VRで当時の暮らしの再現」など様々なアイデアを得ることができた。施設の周知に必要な広報媒体については、一般回答者は「フリーペーパー」と回答した人が40％と最も多く、次いで「広報紙（自治体関連）」が27％であった。学生回答者は、「SNS（Instagram、Twitter、TikTok等）」と「フリーペーパー」が22％と最も多く、次いで「広告（CM等）」が16％であった。よく使用するSNSはどちらも「Instagram」が最も多かった。福井洞窟の認知度を上げるために、佐世保市内や長崎県内、県外などに「フリーペ

ーパー」を設置し、若い世代向けに「Instagram」を使い、映える写真などを投稿して広報活動を行い、年齢が高い世代には「Facebook」を使って広報活動を行うことで、幅広い世代に福井洞窟を周知することが出来るのではないかと考えられる。

（２）遺跡博物館アンケート調査

全国の遺跡博物館では、遺跡を保存すると同時に様々なソフト事業を実践している。愛媛県の上黒岩岩陰遺跡や高知県の龍河洞などの洞窟遺跡には博物館が設置され、様々な事業を展開している。また、福井洞窟と同様に、北海道の恵庭市郷土資料館とカリンバ遺跡（3.7km）、三重県の松阪市嬉野考古館と天白遺跡（5.4km）、福岡県の糸島市伊都国歴史博物館と平原遺跡（3.6km）のように、遺跡と博物館の距離が３km以上離れる事例も全国に存在している。これら他地域の事例を比較研究することにより、福井洞窟ミュージアムのデメリットである距離の問題を解決する方法・方策を見出し、効果的な事業展開が可能になることは明らかであるため、全国の遺跡博物館におけるソフト事業の実践例を調査した。

本研究の開始と同時に、全国の遺跡博物館の一覧化とソフト事業の集成を実施した。全国の遺跡博物館は、本学の教員が編集に協力した『地域を活かす遺跡と博物館－遺跡博物館のいま－』（2015同成社）の巻末表を基に、同書では割愛された中世以降の遺跡博物館と新設館を増補する形で一覧表を作成した。文献調査の結果、全国の主要な遺跡博物館403館を一覧化した。

一覧化作業と並行して、各館のソフト事業の集成を行った。本研究では、体験講座、クイズ、グッズ、ルートマップ、効果的な情報発信・移動手段の工夫など、建物づくりや展示づくりにあたらない諸事業を「ソフト事業」と定義づけており、文献調査でも当該定義に則って集成作業を行った。なお、各館のソフト事業は、館の設立当初に方針が決められ、毎年の事業計画や財政状況に応じて年度ごとにアレンジしながら実施している。このため、書籍等に掲載されたソフト事業ではすでに実施されていないものがあると想定されたため、更新性の高いメディアである各館のWEBサイト、チラシや博物館ニュース、SNS等の記述を基に集成した。遺跡博物館の中には、ソフト事業の実践事例が不詳である例が89館存在したものの、全体の約78％にあたる314館では何らかのソフト事業を実践していることを把握した。

また当初予定では、書籍やWEB等を用いた文献調査と電話や書簡による全国の博物館への聞き取りを計画した。また、九州圏内の遺跡博物館には、吉野ケ里遺跡や西都原考古博物館をはじめとして、ソフト事業に力を置いている遺跡博物館が多く存在するため、遺跡博物館への実地調査を行い、学芸員等に意見を聴取すると共に各種ソフト事業を実際に体験することで、有効なソフト事業の模索を意図した。

しかし、2020年度前半より蔓延した新型コロナウイルス感染症によって、県外への移動が制限され、遺跡博物館の実地調査が不可能となった。これを踏まえ、実地調査を文献調査でピックアップした日本国内の主要な遺跡博物館に対し、同年11月13日（金）～12月12日（土）の日程でアンケートを送付する形に切り替えて実施した（長崎国際大学研究倫理審査番号F-34）。アンケート実施対象とした遺跡博物館は、①遺跡とは距離が離れているが特定の遺跡について専門的に扱っている、②新設あるいは近年リニューアルした館、③旧石器時代の遺跡を扱う博物館、④地元住民の博物館への参画が顕著の４点を条件とし、一覧表に集成された館の中から教員が主要な25館を選定し、文化財課側で５館を増補する形で30館を選定した。アンケート

調査にあたっては、依頼文書、アンケート用紙、同意撤回書を市教委が用意した封筒に封入し、発送した。アンケートの回答には、Google社が提供する「Googleフォーム」を利用し、オンラインでの回答を可能とした。その結果、21館から回答を得ることができた。（築城）

（３）歴史の福井谷体験ツアー

①歴史の福井谷体験ツアーの概要

同ツアーについては、ツアーを主催する吉井エコツーリズムの会の和田隆会長が詳しい。本節では、『令和２年度学長裁量経費採択地域文化資源の活用に向けたソフト事業開発に関する研究実施報告書』に同氏が執筆した内容を元に、筆者が要約を行った（長崎国際大学博物館学芸員課程、佐世保市教育委員会文化財課2021）。

吉井町は、2005（平成17）年４月に佐世保市と合併したが、その際「新市の中心地から遠く離れ最北端に位置する人口６千人の小さな町が、25万人の佐世保市との合併で、町は新市に埋没してしまうのではないか」との懸念があった。そこで、町の北部にある、通称「福井谷」に集中している福井洞窟（国史跡）や直谷城跡（県史跡）をはじめ、文化財や自然景観などの資源の活用で、合併に伴う埋没感を払拭する一助にと、合併から３年後の2008年７月に町民有志によって「吉井エコツーリズムの会」が設置された。そして、設置後最初に始めた事業が「歴史の福井谷体験ツアー」である。以降、毎年回を重ね、主に市内から毎回30名前後の参加者があり、2016年まで吉井エコツーリズムの会が単独で８回実施した。同ツアーは、上直谷地区公民館を拠点に、徒歩により、①上直谷地区公民館（オリエンテーション・腰兵糧作り体験）、出発→②直谷城跡（見学・昼食・縄文弓体験）→③福井洞窟（見学・火起し体験）→④直谷城主の墓（見学）→⑤上直谷地区公民館帰着という行程で実施された。

また、合併直後から史跡福井洞窟の再調査に向けた準備が進められ、2014年には同遺跡の本格的な再調査が実施された。その結果、新たに多くの出土物や知見が得られ、同遺跡の重要性が更に高まり、「福井洞窟ガイダンス施設（仮称）」建設の計画が立てられた。同施設は、吉井町の中央部に建設されることとなったが、北部にある福井洞窟との距離が約４kmあり、その間を見学者のためにどう繋ぐかが課題となった。このため、すでに吉井エコツーリズムの会によって毎年実施されている「歴史の福井谷体験ツアー」が活用され、「モニタリングツアー」として市教育委員会へ事業委託された。同ツアーは2017年から４年間、４回実施した。委託後は、ツアーの拠点を吉井地区公民館に移して実施された。モニタリングツアーとしては、様々な移動手段を模索するため、毎回異なる手段を用いた。第９回は全行程マイクロバス使用、第10回は往路徒歩、帰路は路線バス使用、第11回は全行程自転車（15台、うち８台は電動アシスト付）使用、第12回は往路徒歩、帰路は路線バス使用とした（写真５）。行程は、①吉井地区公民館（オリエンテーション・腰兵糧作り体験）→②町内各石橋群（見学）→③福井川橋梁（見学）→④直谷岩陰遺跡（見学）→⑤直谷城跡（見学・腰兵糧で昼食）→⑥福井洞窟（見学・縄文弓射的、火起し体験）→⑦吉井地区公民館（帰着）である。

写真５　歴史の福井谷体験ツアー

（宮崎）

②2020年度ツアーとクイズラリーの実践

2020年度のツアーは、2020年10月25日（土）に実施した。見学行程に変更はなかったものの、学長裁量経費事業の一環として学生が考案したソフト事業を試行することとなった。ソフト事業案は、ものづくり体験やスタンプラリーなど34の案が出たが、ツアーに組み込む関係上相性の良いクイズラリーを選定した。

クイズラリーは、要所ごとに２、３名ずつ学生の担当者を設定し、それぞれ事前調査及び問題作成と当日の出題を担当した。また、参加者の回答意欲向上を目的として、クイズの正解率が８割以上の参加者に景品をプレゼントした。さらに、本クイズラリーでは、ツアーで回るスポットごとに関連したクイズを出題し、クイズ形式は三択式、記述式、簡単なイラスト問題（描画式）の３種を設定した。以下に、出題したクイズを記載する。

表１　クイズラリー出題設問一覧

１．石橋、福井川橋梁（担当：宮崎・小川）			
問１　再来年で築100年になるのはどの橋でしょうか。（三択式）	A　橋川原橋	B　前岳橋	C　曲川橋
問２　近代的工法を用いた橋は、板樋橋の他に何橋があるでしょうか。（三択式）	A　眼鏡橋	B　古野橋	C　西海橋
問３　日本最古の本格アーチ式石橋は何でしょうか。（記述式）			
問４　福井橋橋梁の形を簡単なイラストで描いてください。（描画式）			
問５　この橋は何年に完成したでしょうか。（三択式）	A　1944年	B　1924年	C　1994年
２．直谷岩陰（担当：太田・築城・近藤）			
問１　狛犬を描いてください。（描画式）			
問２　この神社の名前は何でしょうか。（記述式）			
問３　第２層から出土した爪型文土器という土器がありますが、爪は爪でも何の爪でしょうか。（三択式）	A　人の爪	B　狩った動物の爪	C　ペットの爪
３．直谷城跡（担当：相知・日下・藤高）			
問１　直谷城跡は別名何と呼ばれているでしょうか。（三択式）	A　鶴ヶ城	B　大村城	C　内裏山城
問２　直谷城は何年存続したでしょうか。（三択式）	A　150年	B　20年	C　460年
問３　直谷城で最も守りを固めた場所はどこでしょうか。（三択式）	A　搦手門	B　井戸	C　天守閣
問４　直谷城は、誰の城と呼ばれているでしょうか。（三択式）	A　志佐氏	B　織田信長	C　大友宗麟
４．福井洞窟（担当：太田・築城・近藤）			
問１　国指定遺跡に指定された年は何年でしょうか。（記述式）			
問２　福井洞窟の岩盤は何でできているでしょうか。（三択式）	A　泥岩	B　砂岩	C　凝灰岩
問３　福井洞窟に人が住んでいたのはいつの時代でしょうか。（記述式）			

クイズの作成にあたり、参加者に興味を持ってもらい、ガイドの説明を聞いてもらえるように心がけた。また、史跡や看板をよく見てもらうために、外観だけでは答えが分からない問題となるようにした。クイズ用紙は、問題と回答欄を一枚にまとめて記載し、当日参加者全員に配布した。そして、スポットごとにガイドの説明が終わり次第、クイズを出題した。事業実践の結果、参加者との交流が多く楽しく行えた点が良かった一方で、ツアールートが車道と近く、出題時の声が聞こえず、戸惑うが参加者がいた。さらに、ツアー後のアンケートでは、問題の難易度に差がありすぎるという意見もあった。このような意見を参考にしながら、今後のミュージアムの活動としてブラッシュアップしていくことが今後の課題である。（近藤）

（４）吉井地区の地域文化資源マップの作成

本事業は、ミュージアム開館時の周遊観光を意図して、吉井町の福井谷周辺の地域文化資源を掲載したマップを作成したものである。本マップは、徒歩で文化財等を巡る際の参考とすることをコンセプトとしている。今回は、吉井町内の福井谷・佐々谷エリアを散策するにあたり、特に紹介したい７箇所の文化財の紹介に加え、近隣地域のおすすめスポットや休憩施設等の情報を組み込んだ。選択した文化財は、歴史の福井谷体験ツアーおよび吉井エコツーリズムの会の和田隆氏にご教授いただき、学生が特に紹介したいものをピックアップした。

①検討方法

マップの検討にあたっては大きく４つの役割分担を行い、マップ作成の効率化を図った。

編集リーダーは全体レイアウトのチェックや文章校正等を行った。地図面担当は地図のトレース、文化財、休憩所、公園等のスポットをマップ内に記す作業、そして全体のデザインを行った。執筆担当は各スポットの概要をまとめた解説を作成した。写真担当はマップに使用する写真の選定および加工を行った。また、イラストが得意なゼミ生がいたため、４つの役割とは別に、マップに使用するイラストの一部と、アイコンの作成を担当した。

マップはカラー両面刷りで、Ａ４サイズを３つ折りにしたものである。これは、リーフレットを作成するときによく使用される大きさであり、今回この大きさを選択したのもポケットに入り、持ち運びの邪魔にならないことを意図したためである。

なお、全体の文字や写真の配置は、一般社団法人チーム俵が発行している『野崎町ごちそうトレイル』を参考にした。

②マップ内の要点・工夫

表面は、表紙と福井谷散策で訪れてほしいスポットの詳細を記載した。全体のレイアウトとして、表面は薄い緑色を基調とし、自然と触れ合うような散策ツアーをイメージした。各スポットの見出しには山吹色を取り入れ、全体的なまとまりを意識した（写真６上）。

表紙は、旧石器時代をイメージし、人間と動物の足跡を入れて、ポップな感じに仕上げた。また、各スポット紹介として、福井洞窟ミュージアム、吉井の石橋群、福井川橋梁、直谷岩陰、直谷城跡、福井洞窟、御橋観音の７箇所を選定し、和田氏の説明や市教委が提供した資料をもとにそれぞれの特徴、歴史をまとめた。各スポットの配置は、福井洞窟ミュージアムから福井洞窟に至る散策コースに沿って配置した。また散策コース外ではあるが、表面の左下に吉井町を訪れる際のおすすめスポットとして、五蔵池を紹介している。

裏面のマップは、北は福井洞窟、東は春明橋、南はサンパーク吉井、西はソレイユ吉井ま

でを範囲とした。背景色は淡い緑色とし、見やすいデザインを意識した。道路は、散策コースをオレンジ色とし、それ以外の道路は青色にした。また、川は水色を取り入れ、鉄道は線路状に、国道は太さを変え、見たときに情報が入りやすいように設定した。アイコンは、文化資源は赤字に白抜きのアイコンを作り、裏面に解説を入れたものには対応する番号を付した。休憩所は緑地に白抜きのアイコンを作り、イスに座る人のイラストを作ると同時に、代表的な３施設の解説と外観写真を掲載した。また、目印となるような施設は地図内に表示し、黒地に白抜きのアイコンを作成した。学校は校舎のイラスト、交番は警察官のイラスト、郵便局は郵便マークを取り入れ、トイレとバス停のアイコンも地図に記載した。さらに、ポップさを打ち出すため、ゼミ所属学生が描いたイラストを散りばめた（写真６下）。

（太田千）

写真６　福井谷散策マップ
（上：表面、下：裏面）

２．共同研究

博物館学芸員課程と文化財課の共同研究は、「佐世保市の地域文化資源の保存と活用に関する業務」と称して実践した。共同研究は、①宮地区コミュニティセンターの常設展示製作業務と②旧世知原町・旧鹿町町の地域文化資源調査および展示製作業務の２種に分けて実施した。

（１）宮地区コミュニティセンターの常設展示製作

前述の通り、佐世保市宮地区公民館は2021（令和３）年に宮地区複合施設として改装され、それに伴い展示スペースの設置が予定された。2020年度の共同研究では、展示スペースに設置する展示パネルの作製と、常設展示の設置を行った。

展示パネルの作製は、2020年４月より本学大学院観光学専攻および地域マネジメント専攻の所属学生を中心に開始した。展示パネルは、対象年齢を小学校高学年に設定し、レイアウトは佐世保市博物館島瀬美術センターの展示パネルを、内容は佐世保市が市内の小学校に配布している歴史教育副読本『ふるさと歴史めぐり』の記載内容を参考にした。

同年５月に第１案を作製し、５月末に文化財課に提出した。文化財課との協議の中で、第１案の記載内容が解説シートとして使用するのに適しているとの指摘を受け、第１案は活かしつつ別デザインの第２案を作製することとなった（写真７）。

同年６月末からは、学部４年生が加わり、第２案作製に取り掛かった。パネル作製にあたり、まず宮地区に所在する宇都宮神社、宮村館跡、テボ神古墳、中村古墳、鬼塚古墳、正蓮寺の現地調査を行い、展示パネルに掲載する写真の撮影を行った。調査には、文化財課の職員が同行

写真７　展示パネル第１案

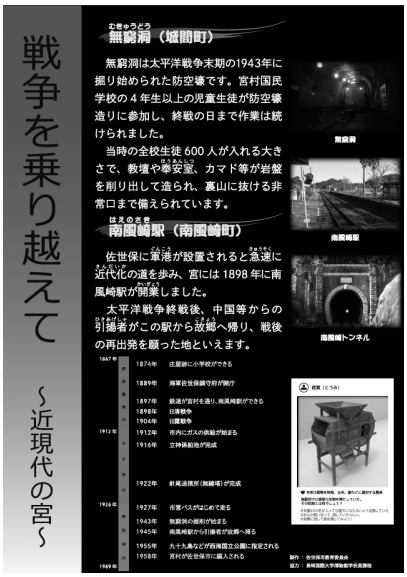

写真８　展示パネル完成版

し、それぞれの場所で説明を受けて、宮地区の歴史について知識を習得した。

その後、７月～９月にかけて学内でパネルの内容を検討した。当該時期は、新型コロナウイルス感染症が拡大した時期であり、Zoomを用いた遠隔協議を中心に実施した。パネルの文章は、先の副読本に加え郷土史やインターネット、現地調査時の説明を参考に執筆した。素案として、若い世代に興味を持たせるようにInstagramを参考にしたトピックスの掲載と、武将や埴輪に吹き出しを付け、会話をさせる案が出された。これらを踏まえ文化財課との協議を重ねた結果、トピックスの名称をInstagramをもじった「Miyastagram（ミヤスタグラム）」にすること、内容は中村遺跡からの出土品や梅ヶ枝酒造など、宮地区の魅力が発信できるものにすること、掲載場所を、小学校低学年でも見やすいように展示パネルの下部にすることを決定した。また、宮地区の歴史と同時代の日本や世界の歴史を、一目で理解できる年表の掲載を決めた。パネルの構成は、古代から現代にかけての５種、「宮地区の始まり～自然に育まれた街～」、「大村湾の覇者～多様な副葬品～」、「七丸八城の時代～宮の由来と争乱～」、「弾圧された仏教～教科書にない歴史～」、「戦争を乗り越えて～近現代の宮～」とし、参加学生がそれぞれ１人１パネルのレイアウト・文章執筆を担当した。学生の素案を基に、文化財課職員がリファインして展示パネルの作製を行った（写真８）。完成したパネルは、2021年１月９日（土）に宮地区コミュニティセンターに搬入・展示され、12日（火）の開所式に合わせて一般公開された。

共同研究では、常設展示用パネルを作製すると同時に、コミュニティセンターで放映する映像コンテンツも併せて制作した。具体的には、宮地区内に所在する戦中期の防空壕「無窮洞」を後世に語り継ぐための約20分間の映像と、宮地区内の文化財をPRする約５分間の映像の２種を制作した。前者は九州メディアネットワークが、後者は本学の学内ベンチャー企業の（株）ジャックラビットがそれぞれ撮影・編集作業を担当した。

（太田直、田川）

（２）旧世知原町・旧鹿町町の地域文化資源調査および展示製作

福井洞窟ミュージアムおよび宮地区コミュニティセンターに関する事業と並行して、平成の

市町村合併で佐世保市となった旧世知原町・旧鹿町町の地域文化資源調査および展示製作を実施した。

前者は、旧世知原町が設置した世知原炭鉱資料館の収蔵資料調査および台帳作成事業である。同館は、旧世知原町の主要産業であった炭鉱をテーマとし、長崎県の文化財に指定されている「旧松浦炭鉱事務所」の建物を保存・活用する形で運営されている。同館には収蔵資料台帳がかつて存在したものの、市町村合併で吉井町など他地域の資料が同館に移管され、台帳の内容は十分でなかった。このような理由から、同館収蔵資料の現状確認と写真撮影、新たな台帳の作成を行ったものである。同事業は、2020年12月６日（日）～21日（月）に実施し、学生11名が参加した（写真９）。

後者は、旧鹿町町が設置し、現在は閉館した旧鹿町歴史民俗資料館の収蔵資料を使用し、鹿町地区コミュニティセンター内に常設展示を設置した事業である。旧鹿町町は、国指定史跡大野台支石墓を擁し、近世には平戸藩領、近代には炭鉱で栄えた街である。旧鹿町歴史民俗資料館は、同町の歴史・民俗・考古・美術資料を収集・保管・展示してきたが、建物の老朽化により閉館となった。しかし、現在も館内には多くの資料が収蔵されており、収蔵資料の活用および地域住民への学習効果を期待して、併設されている鹿町地区コミュニティセンターのホール前に常設展示を設置することになった。

同事業は、2021年２月２日（火）～３月23日（火）に実施し、学生２名が参加した。まず、中島と文化財課担当者で館内の収蔵状況を確認し、概ねの展示方針を決定した。その後、展示計画を学生と共に考案し、文化財課の意見を踏まえて展示構成を確定させた。同展示は、旧鹿町歴史民俗資料館で使用していたローケース３台をクリーニングして活用し、それぞれ１台目に旧石器～弥生時代の考古資料、２台目に中近世の歴史資料、３台目に炭鉱関連資料を展示した。１台目の弥生時代の展示では、国指定史跡大野台支石墓の出土資料を展示すると共に、支石墓の構造をわかりやすく説明するため、学生が支石墓の模型を自作して展示した。また、３台目のケース横に、炭鉱時代に使用されていたトロッコと当時採掘された石炭を組み合わせて露出展示し、石炭に関しては触察体験ができるようにした。さらに、近現代に撮影された旧鹿町町の写真を額装し、ホール入口に設置することで象徴展示とした。

写真９　世知原炭鉱資料館調査

資料の展示と並行して、旧鹿町町の歴史・民俗を紹介する解説パネル５枚を作製し、３月末までに展示した（写真10）。　（中島）

写真10　鹿町地区コミュニティセンターの展示作業風景

４　2021年度事業

１．2021年度事業の概要

2021年度事業は、長崎国際大学国際観光学科の必修科目である「専門演習Ⅰ」（ゼミ）として実

写真11　フィールドワークの様子

施した。本年度のゼミ活動は、佐世保市宮地区をフィールドとし、宮地区コミュニティセンターの企画展示と、宮地区散策マップを作成した。

まず事前学習として、宮地区について文献調査し、ゼミ内で情報を共有した。事前学習では、産業、歴史、自然の３グループに分かれ、それぞれ各内容の調査と調査成果のプレゼンテーションを行った。

その後、７月より宮地区コミュニティセンターで企画展示を行うため、宮地区の地域文化資源を把握することを目的に、５月15日（土）に第１回目のフィールドワークを実施した。当初は複数の施設を訪問する予定だったが、天候不良のため梅ヶ枝酒造、宮地区コミュニティセンター二ヶ所の訪問に変更した（写真11）。

事前学習とフィールドワークを踏まえ、企画展示の計画を検討した。2019年度に作成した宮地区コミュニティセンター収蔵資料台帳を基にテーマと出展資料を検討した結果、衣類や装飾品が多数存在することから、「宮地区の身だしなみ事情～江戸時代から現代まで」をテーマに展示を企画した。７月２日（金）に展示替えを行い、2022年１月５日（金）まで展示した。

2021年度後期からは、宮地区を散策するためのマップを作成するため、改めてフィールドワークを行った。第２回目のフィールドワークは、11月３日（水）に実施した。今回は、第１回目に天候不良で行けなかった無洞窟、正蓮寺、長競石、宮村館、宇都宮神社、デボ神古墳を訪れた。その際、写真撮影、難所把握および聞き取り、飲食店や施設の場所などのマッピングの３つに役割を分担し、調査を実施した。フィールドワーク終了後、学内で調査成果を整理し、マップ作成に取りかかった。マップは2020年度に作成された「福井谷散策マップ」を参考にした。

マップ作成と並行して、本年度第２回目の企画展示の準備を行った。収蔵資料台帳を基にテーマを考えた結果、用途が不明の資料が多いことに着目し、昔と現在の生活用品や建物の違いについて、観覧者に考えてもらう展示を意図し、「What is this?～これなんだ？ここどこだ？～」を展示名とした。展示替えは、第２回目の展示と入れ替える形で2022年１月５日（金）に実施し、2022年７月までを予定している。

なお、企画展示の詳細は後述の通りである。　（衞藤、山口）

２．宮地区の地域文化資源マップの作成

（１）マップの概要

2021年度事業では、宮地区の休憩所、観光スポットなどを徒歩で巡る散策マップの作成を意図した。本マップは、宮地区を散策するにあたり観覧してほしい８箇所のスポットを紹介し、宮地区を一周散策できる路順になっている。各スポットの紹介に加えて、近隣地域のおすすめスポットの紹介を組み込んだ。体裁はＡ４サイズ、カラー両面刷りを三つ折りにして、一般的なリーフレットのサイズを心がけた。ポケットに入り、持ち運びの際に邪魔にならないことを考えた。全体的な文字や写真の配置および検討方法は、2020年度に作成された「福井谷散策マップ」を踏襲している。

写真12　宮地区散策マップ
（上：表面、下：裏面）

（２）要点・工夫

表面は、表紙と宮地区で訪れてほしいスポット８箇所の解説を記載した。全体のレイアウトとして、「福井谷散策マップ」が緑ベースだったのに対し、本マップは水色を基調とした。特に本マップでは、イメージキャラクターに河童を使用し、随所に河童のイラストを盛り込んだ。これは、宮地区内に所在する「長競石」に河童に関わる伝説があることに由来し、ゼミ内のイラストが得意な学生がデザインした（写真12上）。

表紙は、長競石の河童伝説と梅ヶ枝酒造のイメージを取り入れ、気持ちよくお酒を飲んでいる河童をデザインした。また、各スポット紹介として、宮地区コミュニティセンター、無窮洞、正蓮寺、長競石、宮村館跡、宇都宮神社、テボ神古墳、南風崎駅の８箇所を選定した。紹介したスポットは、フィールドワークで実際に訪れて興味深いと感じた所を選定し、コミュニティセンターや各スポットの解説パネルを基にそれぞれの特徴・歴史をまとめた。

裏面の背景色は、表面に合わせて水色とし、見やすいデザインを意識した。道路については、散策コースは暖色系の案が挙がり、赤色を取り入れ、それ以外の道路は黒色にした。また、川は濃い青色を取り入れ、鉄道は線路状にし、見た時に情報が入りやすいように設定した。アイコンについては、2020年度に作成した福井谷散策マップとの整合性を保つため、同マップと同じアイコンを使用した。加えて、河童のイラストを各所に配置した（写真12下）。

（伊達、茶屋、諸岡）

３．宮地区コミュニティセンターでの企画展示の実施

宮地区コミュニティセンターの常設展示製作に博物館学芸員課程が寄与したことは先述の通りである。その際に、３台ある展示ケースの１台を本学の研究・教育のために貸与する旨の合意が、博物館学芸員課程と文化財課の間でなされた。これに伴い、博物館学芸員課程の２年生の授業の一環として、半年に１回のペースで宮地区コミュニティセンターの展示替え（企画展示）を実施している。本節は、これまでに実施した企画展示の内容を提示し、その特色について概観するものである。

（１）第１回企画展「戦前期の学校教育と教科書」

宮地区コミュニティセンターの企画展示は、2019年度に台帳を作成した同センターが収蔵する各種資料の使用を基本としている。

第１回企画展は、2019年度調査時に極めて多くの収蔵数を確認した教科書を主とし、それに関連して「戦前期の学校教育と教科書」をテーマに展示を考案した。宮地区には、第二次世界大戦中に掘られた大型防空壕「無窮洞」をはじめ近代の文化資源が遺存しており、本展示は宮地区の近代の展示を意図した。そして、近代と現代の大きな違いとして「教育」があると考え、

写真13　第１回企画展の様子

教科書にみられる近代と現代の際の把握をコンセプトとした。また、宮地区コミュニティセンターに収蔵された膨大な教科書資料は、同地域に在住していた豊村昌太郎氏が寄贈したものが殆どであり、同氏と関連の深い明治～大正期を主要な時代として選定した（写真13）。

展示に使用した資料は以下の通りである。

表２　第１回企画展出展資料一覧（品目は佐世保市収蔵資料コード表による）

番号	品目	資料名	時代
1	文書資料	高等小学日本史　甲種壹	明治
2	文書資料	中学用読本	明治
3	文書資料	小学日本地図	明治
4	文書資料	高等小学修身訓　生徒用　巻三	明治
5	文書資料	実験日本修身書　巻四　尋常生徒	明治
6	文書資料	最新世界地図　三訂版	大正

これらの実物資料に加え、展覧会の趣旨および展示資料の時代と現代の学校制度を比較・紹介したＡ４サイズのパネルを各１枚、各資料の題箋とトピックスとなるような小パネルをそれぞれ設置した。現在の教科に無い科目「修身」を紹介する小パネルを作り、また戦前期に日本領であった台湾が版図に描かれた世界地図帳や「天孫降臨」から始まる日本史の記述などを展示に組み込むことで、現代の学校制度との差異が明確にわかるようにすることを展示上の工夫とした。

本企画展は、宮地区コミュニティセンターの開所記念式典に合わせて2021年１月12日（火）から開催し、第２回企画展の準備が完了した７月２日（金）までの約半年間実施した。

（中島）

（２）第２回企画展「宮地区の身だしなみ事情～江戸時代から現代まで～」

第２回企画展は、「宮地区の身だしなみ事情～江戸時代から現代まで～」というテーマで実施した。現代のお洒落事情は多岐にわたる。例えばアクセサリーのなかでも、ピアスを開ける場所によって名前が変わったり、ハンドメイドのアクセサリーが人気だったりする。宮地区に伝わっている民俗資料には、現代でも使われている身だしなみに関連するものが多数存在している。今回は、宮地区で収蔵されている民俗資料の中から、装身具と化粧道具の２種を主要な展示物とし、身だしなみに関する特徴的なもの

写真14　第２回企画展の様子

を選ぶと共に、上記２種がわかりやすいよう題箋の縁の色を緑とピンクの２種用意して展示した（写真14）。

展示に使用した資料は、以下の通りである。

表３　第２回企画展出展資料一覧（品目は佐世保市収蔵資料コード表による）

番号	品目	資料名	時代
1	衣・食・住（衣類）	竹製ボタン	昭和戦前期
2	衣・食・住（装身具）	眉墨	大正～昭和初期
3	衣・食・住（装身具）	財布	近現代
4	衣・食・住（装身具）	巾着	昭和
5	衣・食・住（装身具）	草鞋	昭和
6	衣・食・住（装身具）	煙草入れ	近世？
7	衣・食・住（装身具）	蓬莱図柄鏡	近世
8	衣・食・住（装身具）	印籠	近世
9	衣・食・住（装身具）	梳櫛	近現代
10	衣・食・住（装身具）	懐中時計	明治
11	衣・食・住（装身具）	扇子	明治
12	衣・食・住（装身具）	櫛と笄	近現代
13	衣・食・住（装身具）	口内用スプレー	近現代

第２回企画展において工夫した点は、絵本の『ミッケ！』をオマージュし、それぞれの展示物が当時どのように使用されていたかを観覧者に問いかけて、問いかけに対応する展示物はどれか探すクイズ形式にした点である。問いかけの全文は以下の通りである。

①この時計、音がしないよ、故障かな？	⑤くしが１本、もう１本！
②もう片方はどこへ。わらじが一足。	⑥おうぎもいいセンス…笑
③このもんどころが目に入らぬか。	⑦くしを使うには、鏡もいるね。
④財布が落ちている。誰のかな？	⑧茶色のボタンは、すぐ見つかるね。

上記の文章は、展示物の特徴、使用の目的に基づいて考えた。例えば②はわらじが片方しか残っていなかったため、もう片方のわらじはどこに行ってしまったのだろうか、と問いかけると共に、展示物の中からわらじを見つけることを意図した。また⑦は⑤でくしが展示内のどこにあるかを探した上で、くしを使用するためには鏡が必要であることをから、当時の身だしなみを行う状況を想像してもらうような文にした。絵本のオマージュであることから、子供から大人までどの年代にも問題文が理解できた上で楽しめる文章にした。

また事前に学内の博物館実習室で、宮地区コミュニティセンターの展示ケースと同じサイズ

写真15　第３回企画展の様子

になるよう水糸を机に引き、展示をしたい物と同じサイズになるよう紙を切って、展示物と題箋とパネルが展示ケース内に納まるように、シミュレーションを行った。そこで観覧者が見やすいように試行錯誤をして、展示物の角度やパネルの場所の配置を決めた。これを元に実際に現地で展示物の配置を行い、見え方やバランスなどの細かな調節をして展示を完了した。

（大黒、朝永）

（３）第３回企画展「What is this?～これなんだ？ここどこだ？～」

第３回企画展は、コミュニティセンターを訪れる人にどうすれば展示を楽しんでもらえるかという視点からテーマを考案した。今回の展示のコンセプトは、過去に使用されてきた生活用品や建物などが、現在とどのような違いがあるかという点である。展示をするにあたり、コミュニティセンター収蔵資料の中から、使用方法や存在が不明なものを８種と、現在でも観光スポットとして有名な場所が描かれた絵はがきを選定した（写真15）。

出展資料は、以下の通りである。

表３　第３回企画展出展資料一覧（品目は佐世保市収蔵資料コード表による）

番号	品目	資料名	時代
1	衣・食・住（家事・調度品）	陶製灰皿	近世～近現代
2	衣・食・住（家事・調度品）	火熨斗	近現代
3	生産・生業（農具）	農業用倉庫用鍵	近現代
4	生産・生業（その他）	方示器	不明
5	歴史資料（その他）	矢立て	近世
6	歴史資料（その他）	聴診器	近現代
7	自然史資料（植物資料）	香	近現代
8	自然史資料（化石）	ヒトデの化石	不明
9	文書資料（昭和）	絵はがき（東京名所）	昭和
10	文書資料（昭和）	絵はがき（京都名所）	昭和

本展示は、各資料に対して観覧者が考える「これなんだ展示」の手法を採用した。「これなんだ展示」は説示型展示の一つで、資料を展示して観覧者に考えさせる展示手法である。今回は、昔の道具の中で使い方がよく知られていないものについて考える「これなんだ」と、今とは風景が異なる昔の場所について考える「ここどこだ」の２種の展示を意図した。

「これなんだ」は、絵はがき以外の物質的な資料を展示した。例えば矢立てや火熨斗など知っている人はすぐに理解できるものと、ヒトデの化石や方示器、聴診器など何度見てもよくわからないようなものをピックアップして展示している。

「ここどこだ」は、昭和初期の絵葉書を展示した。展示には、昭和初期の東京の町並みや京都の様々な名所の絵はがきを使用し、その絵がどこかを考えるという手法を採った。東京の町並みは銀座通り、浅草仲見世、上野公園の西郷銅像を、京都の名所は金閣、銀閣、渡月橋を採用した。

今回の展示は、展示を観覧して資料について考えさせ、解答を見ることで驚きと発見を得てもらうことを意図した。このため、展示の解答を別紙に印刷し、入口付近に配置した。

これらの実物資料に加えて、展示の概要を示したＡ４サイズのパネル１枚と、問題を記載した題箋14枚を作製した。全体的なパネルデザインや展示物の配置、各資料の問題文は、学生たちで意見を出し合いながら決定・執筆した。（岩崎、椎葉）

５　研究の成果

本研究は、博物館学芸員課程と自治体が連携することにより、地域文化資源の周知方法についての検討を行うと同時に、実践的な学芸員養成について模索した研究である。本研究を実践することにより、本学と文化財課の両者に利のある連携活動を実践できていると推察される。

まず、本学側の教育・研究効果としては、学芸員に必要な技能を習得するための多種多様な機会を得られたことである。本学は大学博物館を有しておらず、2017年度末にローケース３台の寄贈を受け、この頃から学内での学生主体による展示活動を開始したものの（落合ほか2020)、学芸員養成における多様な経験を積める機会に乏しかった。このような理由から本学は、周辺の地方自治体の協力を得て、実践的な学芸員養成の方法を模索してきた。例えば、本学が所在する佐世保市に隣接する波佐見町との連携は2015（平成27）年から実施し、学長裁量経費に伴う展示活動、2021年に新設された波佐見町歴史文化交流館のミュージアムグッズ開発、全国大学博物館学講座協議会西日本部会令和元年度研究助成を得て実施した調査・研究および展示活動により、学生の調査能力、整理作業能力、展示能力を涵養する教育を実践してきた（中島ほか2021)。

一方、佐世保市との連携では、調査能力・展示能力の涵養に加え、企画能力や広報能力についても養うことができた点が成果である。例えば、2020年度学長裁量経費では、福井洞窟ミュージアムで実践できるソフト事業やミュージアムグッズを学生が考案し、ソフト事業の一部は2021年度に本学の授業科目「地域連携活動」の一環として福井洞窟ミュージアムで実践することができ、グッズも2022年度に商品化される予定である。2021年度事業では、宮地区コミュニティセンターの企画展示として学生が展示企画を立て、年２回の展示替えをしながら運営している。また、2020・2021年度に学生の企画・デザインにより作成した地域文化資源を周遊するマップは、文化財課および佐世保市市民生活部コミュニティ・協働推進課の協力を得て各種コミュニティセンター等に設置・配布され、佐世保観光に訪れる人々の一助となっている。佐世保市との連携により、多様な活動を実践する場の提供を得て、学内学習だけでは学ぶことのできない多様な知識・技術を学ばせることができた。同時に、学生が活動した成果が対外的に広く公表されることで、学生の意識・モチベーション向上にもつながっている。加えて、宮地区コミュニティセンターの企画展示は次年度以降も継続し、マップ作成もフィールドを変えつつ継続事業として実施することが決定しており、持続的な官学連携による地域貢献の基礎を構築

できたことが成果である。

また、連携実践による文化財課側の効果としては、①地域文化資源に関する基礎的な情報の取得、②資料館・公民館収蔵資料の把握、③学生の発想によるソフト事業案の取得、④大学の協力を得た地域文化資源周知の４点に集約されると思われる。①②は、文化財課の業務内容と考えられるものの、非常に広大な市域の文化財業務を実施している同課ではマンパワー的に実現が難しいと考えられる。この点に関し、本学側は当該活動をすることで学生の教育に繋がっていくことから、双方に利益があったと想定できる。③は、学生が持つ柔軟かつ斬新な発想を新設されるミュージアムに活かしてほしいとの要望を受けたもので、事業案およびグッズ案を提示したうえでその一部を実践したことは、ミュージアムの事業として今後活用するための契機となり得るのである。また④は、①～③の要請に加え、継続的な事業の構築という意味で効果があったものと推察される。（中島）

おわりに

本稿は、2019年度から2021年度に実践した長崎国際大学博物館学芸員課程と佐世保市教育委員会文化財課の連携事業を中心に、地域文化資源周知のための取り組みについて概観した。当該連携活動を実践することで、学生の学芸員としての資質・能力の向上、市内地域文化資源の周知、市内の文化・文化財関連事業の推進に一定の効果があったものと判断される。

一方、３年間の連携事業を実践する中で、連携に関する課題も把握することができた。

まず、連携にあたっての意思疎通の問題である。市と大学の包括連携協定は2015年に締結されていたものの、博物館学芸員課程と文化財課の連携は2019年度からの開始であり、それまで接点は殆どなかった。2019年度の事業開始にあたっては、双方の担当者間で協議を行っていたものの、2020年度事業は事業内容が拡大されたこともあり、年間を通じて十分な協議ができていたとは言い難い。また、双方において求めるレベルや文化財業務と教育活動の考え方に相違があり、事業運営に困難をきたした面もあった。2021年度は、前年度の反省から事業内容を絞って実施し、また協議の機会を増やして対応したことで、大きな問題もなく事業を実施することができた。2022年度も事業を継続する予定であることから、緊密な連絡・協議を今後の課題としたい。

また、新型コロナウイルス感染症の影響により、2020・2021年度においては十分な調査・研究が展開できなかった点も多い。例えば、宮地区コミュニティセンターの展示パネル作製および福井洞窟ミュージアムのソフト事業の検討にあたっては、その検討期間の殆どが大学の入校制限期にあたり、対面での十分な検討・調整を実施できなかった。適宜Zoomを使用した協議は実施したものの、円滑な意思疎通ができていたとは言い難く、大学側での計画の練り込みが不十分であった感は否めない。また、2020年12月や2021年８～９月、2022年１月といった感染が急拡大した時期に予定していた現地調査は軒並み中止となった。各年度に実施計画を立てて連携事業は実践したものの、計画どおりに事業を推進できず、年度末にしわ寄せがきた点も問題として挙げられる。新型コロナウイルス感染症の影響は今後暫く続くと思われるため、過去２年間の感染状況や祝祭日・イベント等の予定を加味し、感染状況が収まっている時期を選んで各種計画を立案していくことが今後の課題である。

同市との連携活動は現在も継続しており、2022年度は先述の宮地区コミュニティセンターの企画展示、市内の地域文化資源マップ作成、旧鹿町歴史民俗資料館収蔵資料の調査および台帳化を実施していく計画である。これらの事業は、今後複数年にわたり継続実施を予定している。これらの連携を継続していくことで、大学側には学生の学びの場の提供、市側には大学が持つ知識や技術、人材を市の事業として利用できる点にメリットがあり、連携の成果を地域に還元することで地域住民の地域文化に対する意識の向上、観光客への当該地域の周知に繋がると考えられる。学生教育と地域貢献の観点から、今後も積極的な連携事業を実践していきたい。

（中島）

参考・引用文献

落合知子、中島金太郎、鐘ヶ江樹、松永朋子、甲斐彩菜、鐘ヶ江幹（2020）「学芸員養成における展示活動を通した資料保存教育の実践」『文化財保存修復学会第42回大会　研究発表集』文化財保存修復学会、pp.220-221。

長崎国際大学博物館学芸員課程、佐世保市教育委員会文化財課（2021）『令和２年度学長裁量経費採択　地域文化資源の活用に向けたソフト事業開発に関する研究　実施報告書』。

中島金太郎、落合知子、中野雄二、盛山隆行、鐘ヶ江樹、鐘ヶ江幹、太田直宏、田川太一、中武秀元、吉岡和、太田千晴、近藤あかね、築城ひかる（2021）「地方自治体と協働した実践的な学芸員教育の試み」『全博協研究紀要』第23号、全国大学博物館学講座協議会、pp.31-53。